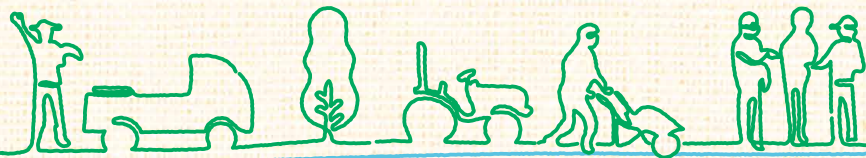


- 青果物の集荷と販売
- 多様な販路の確保、集出荷場などの整備
- 生産基盤の維持・拡大

栄養豊富で食卓に彩りを加えてくれる果実。生産量の減少や単価の上昇で消費者の果実離れが進む中、JA全農園芸部は、生産を維持・拡大し、生産量の減少に歯止めをかけるため、果樹の省力化技術

の導入を支援する事業をスタート。生産者の管理作業負担を軽減する省力栽培の導入を後押しし、果樹産地の振興を支える支援事業の狙いや展望について、お聞きしました。



果樹生産維持へ省力化を支援

助成措置で

新たな一歩後押し

● 果樹生産振興事業の背景、目的は？

JA全農園芸部は2021年度から、果樹生産者の省力化を後押しする「果樹生産振興事業」をスタートしました。高密度栽培など地域に合った省力生産方式の導入にかかる費用の一部を助成。生産者の作業負担を軽減し、果樹の作付面積の維持・拡大を図るのが狙いです。

背景には、生産量の減少と消費者の果実離れがあり、生産者の高齢化や労働力不足、加えて近年恒常化する気象災害の影響により、十分な生産量の確保が困難になってきており、それに起因して価格が上昇し、消費者の購入の機会も減っています。この流れを食い止めるため、耕種資材部と協力して事業に取り組んでいます。

● 助成内容や仕組みは？

県本部を中心にJA、生産者とよく話し合い、意欲ある生産者や地域のリーダー的生産者、Uターン就農など、さまざまな方に省力樹形※のモデル園地を設けていただいています。設置から5年間、技術普及のための調査研究にご協力いただくことを条件に、上限150万円(21年度のみ130万円)を助成します(耕種資材部と連携し、全農の資材を活用した場合は、30万円の追加支援)。2〜20アール程度を想定しており、品目や就農年数などの条件もないため、初期投資にかかる費用負担を軽減できます。

※木を直線的に密植し、作業動線を単純で効率にするため、労働時間の削減や早期成園化が可能

● モデル園地の具体的な取り組みは？

21年度は青森県や長野県、福岡県の5件をモデル園地に選定しました。青森県で導入したのが、リンゴの高密度植わい化栽培(ツールスピンドル栽培)です。慣行栽培では大きな木をつくるため剪定などの作業が大変で、脚立を使った作業も多く、農作業事故の危険もありました。そこで、新たに導入された高密度植わい化栽培は、大型化

園芸部 園芸振興課
縄田 孝二さん

2014年入会。果樹や果樹苗木の生産振興、消費宣伝に加え、関連する制度や政策、予算に対する要望のとりまとめを担当。福岡県本部での果樹生産担当の経験を生かし、地域の特性に合わせた生産振興を支援する。



しない特性を持った苗木(フェザー苗)を規則的に植え、樹体をコンパクトに管理。作業動線が一直線になり、より少ない労働力・時間で作業ができるようになるのが特長です。脚立を使用する時間も削減でき、転倒などによる事故も防ぐことができます。また、通常の苗木よりも早期成園化が可能のため、早い段階で収益を確保することも可能です。

助成事業を利用した生産者やJAからは「初期投資がかなり抑えられるため、一歩を踏み出す大きな後押しになった」などの声をいただき、業務を進める上での原動力になっています。



リンゴの高密度植わい化栽培を導入したJAつがるにすぎたのモデル園地

● 今後の展望は？

23年度までの3力年で全国に15カ所のモデル園地を設置することを目標としています。今年度のモデル園地は現在選定中で、10月には第2回目の募集を始める予定です。

来年度で事業開始から3年目を迎え、開始時に導入した果樹が実をつけ始める時期です。今後はモデル園地の調査結果を蓄積して省力化技術の県域単位での普及や地域横断展開および新たな支援も検討していきたいと思えます。また、担当業務は生産振興ですが、同時に需要喚起も必要だと考えています。他部署と連携して消費宣伝にも取り組み、果樹生産の衰退を食い止めるため、精一杯頑張ります。